

美術館と教員の協働プログラム —高校生を対象とした実践から—

藤島 美菜

はじめに

愛知県美術館は、1996(平成8)年に子ども向け鑑賞会を始めてから現在まで、幼児から児童・生徒を対象に様々な教育普及事業を行ってきた。子どもとその保護者を対象とした鑑賞会からスタートした子ども向け事業は、現在は幼児から小学・中学・高校生を対象に、発達段階や校種別に開催している。当初、学芸員が試行錯誤しながら行っていた「子ども鑑賞会」等の事業は、対話を主とした鑑賞会だったが、現在では学芸員と教員が連携し、学齢に応じた作品への様々なアプローチ法や造形ワークショップを伴うものに変化している。こうした変化は、学芸員と教員が協働でプログラムを立案するプロセスを繰り返すなかで生じた結果であり、社会の動向やその変化の中で生きる子供たちの興味、関心や成長をも反映したものである。本稿は、2008年度以降実践してきた高校生を対象としたプログラムの中から一部を紹介し、その事例から、美術館における鑑賞会や造形ワークショップの意義をあらためて問うものである。プログラム実施の背景や概要を藤島が執筆し、具体的なプログラム計画の紹介は、愛知県美術館鑑賞学習ワーキンググループのメンバー（元高校教員）が執筆を担当した(後掲83頁－98頁)。

1. 実施の背景

教員と協働したプログラムを始めるまで

現在、愛知県美術館が主催する子ども向け事業は、学芸員と教員が協力して行っている。小・中・高の各現場の有志の教員が参加するもので、愛知県美術館の「鑑賞学習ワーキンググループ」の教員メンバーが積極的に活動を行っている。ここでまず、各プログラムの実践にあたって、美術館と教員が協力関係を構築するに至るまでの歩みを振り返り説明しておきたい。

1998(平成10)年告示の小学校・中学校の学習指導要領において、「地域の美術館」の活用、「美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること。」という具体的な例示を受けて¹、鑑賞学習に関心のある教員の引率で、小・中学校の児童・生徒が愛知県美術館にも見学に訪れた。当館の1998年前後の団体見学数の記録がなく実際の見学数は不明だが、これに先立ち愛知県美術館では1992年10月に開館後、徐々に学校団体が美術館を訪れるようになり、特に3学期の1～2月には、小・中学校の団体鑑賞への対応を多く行っている。美術館は、学習指導要領の改訂や学校現場の動向に応じて、以下のように教員向けと子ども向け事業を行った。

1 1998(平成10)年12月告示の小学校学習指導要領に「第2章 各教科」「第7節 図画工作」「第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」の「2-(6)」において、「各学年の「B鑑賞」の指導に当たっては、児童や学校の実態に応じて、地域の美術館などを利用すること。」とある。また、「中学校学習指導要領(平成10年12月)」の「第2章 各教科」「第6節 美術」「第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」の「2-(5)」においても、「各学年の「B鑑賞」の題材については、日本や諸外国の児童生徒の作品、アジアの文化遺産についても取り上げるとともに、美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること。」とある。

年度	
1996	子どもと保護者向け鑑賞会実施[担当:学芸員]
1997	教員対象 企画展展示説明会 開始 小学生・中学生対象 子ども鑑賞会実施 [担当:学芸員]
1998-2001	小学生対象 子ども鑑賞会実施[担当:学芸員・研修生(学生)]
2001	「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」開始(企画展展示説明会から改称)
2002-2005	小学生・中学生対象 子ども鑑賞会実施[担当:学芸員・研修生(学生)]
2005	「鑑賞学習ワーキンググループ」発足
2006-2008	小学生・中学生対象 事業実施[担当:学芸員・学生・教員]・企画展アーティストによるワークショップ実施(いずれも、「あいち子ども芸術大学」助成)
2008	高校生対象 鑑賞&造形ワークショップ 開始[担当:学芸員・教員]

1996年に子ども向け事業に着手してから2005年度までは、小学生、中学生を対象としたプログラムは、学芸員がプランを練り実施した(1996年度 子どもとその保護者対象、1997-2005年度 小・中学生対象)。当時は当館で研修していた学生も立案に加わっている。夏休み期間のほか、春休みや大型の企画展開催に合わせて、テーマ(ねらい [めあて])を設け、鑑賞会や造形活動を伴うイベントも実施した。2006-2008年度は、県の大規模な助成事業(「あいち子ども芸術大学」)の枠内で開催したことで、大学生が中心となって立案したイベントに、小・中学校の教員が加わる体制で実施された。こうした事業に小・中の教員が加わることになったきっかけは、2006年1月に美術館が、美術館と小・中・高の教員が連携して取り組む鑑賞学習に関する研究会「鑑賞学習ワーキンググループ」を発足させ、美術館に教員の活動拠点が出来たことであった。



図1 鑑賞学習ワーキンググループ活動の様子

高校教員との連携

本稿で詳述する高校生対象の事業は、現在では子ども向け事業の年間開催数の半分以上を占めているが、愛知県美術館が本格的に高校教員との活動を始めたのは、小・中学生対象の取り組みより遅く、2008年度以降のことである。その理由の一つには、2006-2008年度に当館は県の助成事業「あいち子ども芸術大学」の枠組みで子ども向け事業を展開したが、高校生は対象外であったことや、鑑賞学習ワーキンググループの活動で高校教員が鑑賞事業を行うようになるまでに環境を整える期間も必要だったためである。

愛知県美術館の鑑賞学習ワーキンググループで活動している高校教員の多くは美術科教員であり、教員は県の次の2つの組織で活動を行っている。①「愛知県造形教育研究会」(愛知県教科教育研究連合会造形部会の一つ)と②「愛知県高等学校文化連盟・美術工芸専門部会」(略称 高文連)である²。

2 「愛知県造形教育研究会」と愛知県高等学校文化連盟・美術工芸専門部会の組織、活動内容について、愛知県美術館鑑賞学習ワーキンググループのメンバーである元愛知県立岩倉総合高等学校教員 高橋承一氏からご教示を得た。

①は、愛知県の各教科の研究会である。各教育委員会の教科指導主事を助言者として、授業や教科書の研究、新学習指導要領の伝達等が行われる研究会である。愛知県の造形部会では、現在も美術科教員の指導主事は不在であり、他教科の指導主事が助言者となっている。なお、当組織の上部組織は、全国高等学校美術工芸研究会で、毎年研究大会を開催している。また②は、授業研究を行うものではなく、文化部の生徒が参加する活動組織である。部員の生徒を対象に「高文連実技講習会」を実施したり、毎年、愛知県内の生徒の優秀作品を展示する「アートフェスター愛知県高等学校総合文化祭」を開催したりしている。「アートフェスタ」は、舞台・展示・パネル・文芸・囲碁の各部門から成り、ここでの優秀者は「全国高等学校総合文化祭」への出場や出品が行われる。2004年に、展示部門の活動の一環で、愛知県美術館の「木村定三コレクションによる 熊谷守一展」（2004年10月8日－12月5日）の会期中に、高文連の実技講習会として美術部員たちが学芸員の解説を受け、企画展を鑑賞するという講習会が行われ、これが当館において、1つの学校単位ではなく団体あるいは組織を対象に行われた高校生向けの初めての鑑賞会となった。愛知県美術館の「鑑賞学習ワーキンググループ」の発足以前であり、「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」に教員が参加して、互いに鑑賞について情報交換を行っていた頃である。結果として、教員たちのもっと鑑賞学習について深く研究したいという要望に応えるかたちで研究会としてのワーキンググループが発足したが、発足より以前に、美術館を利用した鑑賞学習を行うための条件が整いつつあったことが分かる。また、①の「愛知県造形教育研究会」では、小学校・中学校・高等学校の各造形研究会が年1回合同で、総会と研究協議会(実践発表会)を開催しており、2008年(11月12日)に、当館の学芸員が「鑑賞における学校と美術館の連携」という演題で講演を行っている。当該年は輪番で高等学校が運営の当番となったことから、愛知県内の高校の美術科担当の教員が多く参加したとみられている。この頃から鑑賞学習ワーキンググループに、鑑賞学習に関する情報を求めて愛知県内の高等学校の美術科教員がまとまって参加した。「愛知県造形教育研究会」の研究協議会は、実践の結果発表の場ではあったが、実践を企画して行う場ではなかったからである。当時美術館側も、教員が鑑賞学習の手がかりをつかむことを期待して、既に県立美術館で高校生向けガイド冊子の作成や鑑賞会開催の実績があった静岡県の研究グループの高校教員にレクチャーを依頼して、愛知県の教員たちが「鑑賞」について実践的に考察する場を提供するなどした。

一方、鑑賞学習ワーキンググループのメンバーの一員である教員(当時：愛知県立岩倉総合高等学校 高橋承一教諭)が、2008－2010年の3年間に、所属校に於いて県の研究指定推進事業「愛知スーパーハイスクール研究事業」³に名乗りを上げ、「大学・美術館と連携した美術教育の展開」をテーマに掲げて研究事業を行ったことは、当地域の高等学校の鑑賞活動の

3 「愛知スーパーハイスクール研究指定推進事業」は、2008－2010年に、以下の方針と3つの事業の元で展開された。「特色ある学校づくりに重点をおいた実践的な研究」― 県立高校14校において、高度な知識・技能等の習得を目指す。新たな教育課程の開発や文化部及び運動部活動の実力・競技力向上を図る学校活性化の取組など、特色ある学校づくりに重点を置いた実践的な研究を行う。1 教育課程研究指定推進事業―自然科学教育、国際理解教育、環境教育等を重点的に行う高校5校を指定して、高度な知識・技術等の習得や高大連携等を視野に入れた教育課程の研究を行う。2 文化部活動実力向上事業 全国大会等への出場が期待できる部活動3校を指定して、重点的に強化し、効果的な指導方法について研究を行う。3 運動部活動競技力向上事業 全国大会等への出場が期待できる部活動6校を指定して、重点的に強化し、効果的な指導方法について研究を行う。

一つの礎を作ったとみられる⁴。この研究事業は、教科全体に係る研究と地域と連携した広がりある研究を実施するという趣旨のもとで、「鑑賞」を核に、岩倉総合高等学校の1校にとどまらずに関係教員が集って参加し、事業を連携して行った。これと並行して、関係教員は愛知県美術館鑑賞学習ワーキンググループにも参加するようになったのである。「教科研究」に加えて、「実物の作品がある美術館」で、鑑賞を伴うワークショップを企画し実践するという活動に、教員のモチベーションが高められた。美術館もまた、画集やパソコン画面を通して見る作品画像ではなく、美術館という場で作品を感じ他者と意見を交換することの意義を、学校現場を担う教員と共有したいと考えた。以後、愛知県美術館鑑賞学習ワーキンググループの活動は、2008年度から現在に至るまで、高校生向けプログラムを、名古屋市内、愛知県内、また近隣県の学校に所属する有志の高校教員と連携して行っている。教員の担当教科も美術に限らず、これまで社会科や国語科担当の教員も参加している。

2. 高校生向けプログラムの実績(2008～2025年度)

〔表1〕

年度	年月日	時間	鑑賞内容	タイトル	参加数
2008年	2009年1月25日	日 13:00～16:00	アンドリュー・ワイエス 創造への道程	「鉛筆デッサンをしよう」	33
2009年	7月12日	日 13:00～16:00	アーツ&クラフツ展	「携帯電話をデザインしよう」	33
2009年	2010年2月13日	土 13:30～16:00	大ローマ展	ローマ人のリアルクローズ	21
2010年	2011年1月16日	土 10:30～16:00	コレクション展	「なりきり！学芸員～展覧会をつくってみよう」	15
2011年	8月2日	火 10:30～15:30	棟方志功展	「シルシル志功 なりきり学芸員」	27
2012年	8月10日	金 10:30～16:00	マックス・エルンスト展	「フロッタージュとコラーージュでシュールしよう」	23
2014年	8月16日	土 10:00～15:00	これからの写真展	「カメラオブスキュラをつくろう」	24
2016年	2017年1月28日	土 10:00～15:40	コレクション展	「極薄の深さ」	27
2017年	5月27日	土 10:00～15:30	フィンランド・デザイン展	「みつけてつくる自然のかたち」	46
2017年	8月18日	金 10:00～12:30	コレクション展	「写真ってなんだろう？」	27
2017年	11月11日	土 10:00～15:30	長沢芦雪展	「図抜けた絵を描こう！」	61
2019年	6月8日	土 10:00～16:00	コレクション展	「なりきり！学芸員Part2」	27

4 岩倉総合高等学校の研究テーマと事業目標は以下のとおりである。研究テーマ「大学・美術館と連携した美術教育の展開」1 光回線と高画質モニターを活用した遠隔授業による連携教育。2 美術館での鑑賞授業（現地授業）による連携教育。3 美術家、デザイナーを招聘しての「My Work」授業の展開

2019 年	2020 年 2 月 29 日	土	9 : 30 ~ 15 : 00	コレクション展	高校生向け（含特別支援）プログラム「アートと私をつなげる感触」	—	中 ⁵
2020 年	9 月 23 日	水	9 : 45 ~ 10 : 40	オンライン交流	「～名古屋盲学校 & 岩倉総合高等学校 & 愛知県美術館～ネットワーク鑑賞交流—美術館が教室に、ICT で 繋 がる コミュニケーション—」	17	
2020 年	9 月 30 日	水	9 : 45 ~ 10 : 40	オンライン交流	〃	17	
2020 年	10 月 14 日	水	9 : 45 ~ 10 : 40	オンライン鑑賞	〃	17	
2020 年	10 月 21 日	水	9 : 45 ~ 10 : 40	オンライン鑑賞	〃	17	
2020 年	11 月 14 日	土	9 : 30 ~ 16 : 00	古代エジプト展	〃「造って解ろうエジプト展」	23	
2020 年	2021 年 3 月 27 日	土	9 : 45 ~ 15 : 30	横尾忠則展	〃「コラージュしてイメージをつくろう」	15	
2021 年	6 月 19 日	土	9 : 45 ~ 16 : 00	コレクション展	「みんなで探求！ 20 世紀アート なにコレ?!」	—	中 ⁵
2021 年	11 月 13 日	土	9 : 45 ~ 14 : 30	曾我蕭白展	中学生・高校生向けプログラム「水墨画に挑戦！」	16	(中6、高) ⁵
2021 年	2022 年 3 月 12 日	土	9 : 45 ~ 14 : 00	ミニマル・コンセプチュアル展	「疑問と戸惑い、コンセプトチュアルって何？—手引書どおりにつくってみよう—」	4	
2022 年	6 月 25 日	土	9 : 30 ~ 15 : 30	ミロ展	「かんじて見ろって?!」	22	
2022 年	2023 年 3 月 4 日	土	9 : 30 ~ 16 : 15	岡本太郎展	「アートはばくはつだ!？」	30	
2023 年	8 月 12 日	土	9 : 30 ~ 15 : 00	コレクション展	「題名って何？」	6	
2023 年	11 月 4 日	土	10 : 00 ~ 16 : 00	安井仲治展	「カメラオブスキュラを作ろう！」	10	
2023 年	2024 年 3 月 9 日	土	10 : 00 ~ 16 : 00	コレクションズ・ラリー展	「縄文・JOMON・縄文—JOMON MIND—」	14	
2024 年	6 月 22 日	土	10 : 00 ~ 16 : 00	コレクション展	「みて 感じて 伝えて 聞いて 考える」	21	
2024 年	8 月 17 日	土	9 : 45 ~ 16 : 30	アブソリュート・チェアーズ展	「イスでアソブ」	6	
2024 年	11 月 9 日	土	9 : 40 ~ 16 : 00	相国寺展	「若冲の竹林を描こう！」	12	
2024 年	2025 年 3 月 8 日	土	9 : 45 ~ 16 : 00	パウル・クレー展	「クレーを感じて描こう！」	34	

5 2020年2月29日、2021年6月19日に予定していた各プログラムは、コロナ禍の緊急事態宣言およびまん延防止等重点措置により中止した。また2021年11月13日のプログラムは、高校生に加えて、午前中のみ中学生が参加した。

2025 年	5 月 24 日	土	9 : 45 ~ 16 : 00	どうぶつ百景展	「コラージュで浮世絵を分析！江戸の美を感じてみよう」	15	
2025 年	8 月 9 日	土	9 : 45 ~ 15 : 30	コレクション展	「感じたことを包んでみよう」	7	
2025 年	2026 年 2 月 7 日	土	9 : 45 ~ 15 : 30	ゴッホ展	「ゴッホに迫ろう！」	15	

〔表 1〕は、愛知県美術館主催の事業として、鑑賞学習ワーキンググループのメンバーの高校教員と開催してきた高校生向けプログラムの一覧表である。初回は、2008年度の2009年1月に実施している。一方、同年度のそれより以前に、当館の学校団体鑑賞会として、高橋教諭の引率で愛知県立岩倉総合高等学校の生徒たち36名に展示室で鑑賞授業を行っている。一般的な学校団体鑑賞会は、美術館が主導して内容を決定し、学芸員が解説を行う一方向の解説型がほとんどだが、「スーパーハイスクール研究事業の一環」で来館し、学校主導により行った団体鑑賞会として、概要を記録しておきたい。

学校団体鑑賞会

美術館鑑賞学習会 くらべて見よう「自画像を考える」

日時:2008年7月5日(土)9:45~12:00

〔場所〕愛知県美術館 所蔵作品展 展示室7「自画像は自我像？」

〔参加者〕1年生10名、2年生12名、3年生14名

〔事前学習〕7月4日(金)、DVD視聴と説明。愛知県美術館作成の美術館でのマナーや鑑賞の手順を紹介するDVD「美術館へようこそ」を視聴し、授業の目的を説明。

〔スケジュール〕10:00~10:30 所蔵作品展の説明、所蔵作品の一部の解説(藤島学芸員)

10:30~11:30 展示室7で鑑賞学習授業の実施
「くらべて見よう」(高橋教諭)

11:30~12:00 所蔵作品展を自由鑑賞

〔鑑賞作家・作品〕

宮脇晴 《自画像》1920年

大沢鉦一郎《自画像》1919年

野田哲也《日記1987年5月30日柏市亀甲台2-12-4にて》1987年

森村泰昌《フェルメール研究(三人の位置)》2005年(寄託作品)

森万里子《Mirage(Image D)》1997-98年(寄託作品)

澤田知子《I D 400(# 201-300)》1998年(寄託作品)

当館学芸員(藤島)が所蔵作品展についての全体説明と作品数点の解説を行った後、高橋教諭が展示室7で自画像について説明を行った。問いが記されたワークシートに基づき、生徒に見るポイントを指導し、作品について考えさせた。



図2「自画像は自我像？」 鑑賞風景

愛知県美術館高校生向けプログラム「鉛筆デッサンをしよう」

愛知県美術館の教育プログラムとして、高校生向けに初めて行った2009年1月25日(土)実施のプログラムでは、企画展「アンドリュー・ワイエス—創造への道程」を鑑賞後、ワイエスが題材として描いた石や木などのモチーフを、実際の石などの素材を準備し鉛筆でデッサンすることでワイエスの制作過程を追体験した。愛知県立岩倉総合高等学校を中心に複数の高校の生徒33名が参加した。

加えて2月7日(土)午前には、「スーパーハイスクール」の一環として、「高校生のための美術鑑賞1 鑑賞ウォークラリーと感想の共有による鑑賞授業—そこにはいくつもの物語がある『アンドリュー・ワイエス展』—」が実施された。参加高校は5校、参加者は46名である。ワイエス展の会期中には、1月に美術館主催(鑑賞学習ワーキンググループ)、2月に学校主催(スーパーハイスクール事業)によるプログラムと、同じ展覧会において別の目的で2回に分けて実施されており、両プログラムに参加した生徒たちは、鑑賞と造形の両面からアンドリュー・ワイエスの作品に迫ることが出来た。



図3 プログラム風景

3. 高校プログラム 計画から実施まで

現在、愛知県美術館の鑑賞学習ワーキンググループで高校教員のメンバーと美術館が行っているプログラムの計画から実施までのプロセスは次のとおりである。

- ① 鑑賞 コレクション展、企画展
- ② 内容 テーマ検討、鑑賞作品の選択、鑑賞と制作の方法、ワークシート作成
- ③ 材料 必要に応じて購入
- ④ 広報 時間・場所・人数の調整、プログラムタイトル(テーマ)の確定、ウェブでの広報
愛知県造形教育研究会へ周知、関係各学校へ周知、保険等事務
- ⑤ 本番 鑑賞と造形ワークショップ、午前から午後(5～6時間のプログラム)

打合せ回数 ①～④ 概ね3～4回

参加教員 愛知県内および近隣県内高等学校の普通高校、特別支援学校

教員専門教科 美術教科に限らない

教員年齢層 20代から60代

参加生徒 普通高校、特別支援学校

教員は、プログラム毎に各自の都合に合わせて参加し、1プログラムにつき概ね6名前後の教員が参加している。年齢層も幅広く、鑑賞学習に取り組む若手・中堅教員の育成の場にもなっている。学芸員と教員の初発のアイデア出しから、各教員の専門教科や年齢層に応じて様々な意見が出され、議論が活発に行われる。コレクション展と企画展の各展示

からテーマを見出し、プログラムの組み立てを思案する。テーマは、展示された作品から独自に設定する場合が多いが、展示構成全体の意図に合わせてプランを立てる場合もある。

また生徒の鑑賞を深めるためのプロセスには、ワークシートとディスカッションが不可欠である。プログラムの実施中、生徒は鑑賞・ディスカッション・制作のプロセスを通して1枚のワークシートに感想や意見、考察を記述し、テーマで設定された内容を深めていく。ワークシートは、本番実施までに、プログラムの内容に則して検討を重ねるたびに書き換えブラッシュアップして完成させる重要なツールである。一方、高校生が鑑賞を深めていくプロセスは一通りではなく、ディスカッション形式も、ペア、グループ、参加者全体、またはワールドカフェ等々、様々な形式を必要に応じて組み合わせながら行っている。なお、プログラムの総タイトルおよびサブタイトルは、プログラムの内容を詰めきれていない時点から広報で使用するため、プログラムの内容が確定する頃には、内容とずれていることもある。そのため、教員と学芸員間で改めて確認し、プログラムの総タイトルを再検討することがある。この過程でプログラムの主旨もはっきりとしてくるため、それを共通認識する上でも重要な作業である。

教員間の議論

2008年から2025年の間に実施したなかで、プラン作成時の学芸員や教員の意見交換の記録が詳細に残るものを以下に紹介する。具体的な内容は後掲した(85頁-86頁)。

2021年度 2022年3月12日(土) 9:45~14:00 ミニマル/コンセプチュアル展

「疑問と戸惑い、コンセプチュアルって何? 一手引書どおりにつくってみよう」

この記録には、2つの議論が残されている。論点の1つは「プログラムの実施形態」に関するものである。当館はコロナ禍下でも各教育プログラムの計画と実施は極力止めなかったが、緊急事態宣言の発令と同時に諦めたプログラムもあり、この2022年当時のプログラムに関する教員間の話し合いは、参加者集めの話題から始まっている。オンラインという手段を用いても実施したいという発言には実施への強い希望と意志が感じられ、結果的に美術館と教員の今後の基本的方針として、当館のプログラムは実物の作品を鑑賞することが前提であることを改めて確認することが出来た。

論点の2つ目は、「プログラムの目標」についてである。プログラムは、学芸員と教員が展示室で本物の作品の前で話し合うところから始め、企画プランを練り上げるまでに、関わる全員で意見を出し合う。作品から受けた印象や感想、作品に関する情報もベースに、本番までに2~4回話し合い、内容を練り上げるプロセスを重ねている。1回あたりの話し合いは2~3時間内にとどめ、議論を次に持ち越す際は、ワークシートの作成や追加資料の準備を分担するなどして、思考を深めておくことにしている。こうした準備や議論の繰り返しの中で意見も取捨選択されてくるため、ワークショップの企画者である教員、学芸員共に自分の意見に固執せず、議論を積み上げることが出来ている。重要な点は、これら意見のエッセンスがプログラムの目標となり、またプログラムの各構成に生かされてくることである。また、教員の各意見を尊重することで、プログラムの構成の各所にアイディアとして生かされることにもつながる。プログラムは、生徒への問いかけや生徒間で行うディスカッション、造形ワークショップまで、全体を通して一つ一

つのプロセスに意味があり、緻密なプログラムに仕上がっている。

4. 鑑賞&造形ワークショップの実際

①高校生鑑賞ワークショップ「疑問と戸惑い、コンセプチュアルって何？—手引書どおりにつくってみよう—」(後掲85頁－89頁)

日時:2021年度 2022年3月12日(土) 9:45～14:00 「ミニマル/コンセプチュアル」展会期中

会場:企画展「ミニマル/コンセプチュアル ドロテ&コンラート・フィッシャーと1960-70年代美術」、チケット売り場横

人数:高校生4名 教員4名 学生アシスタント2名 学芸員1名

このプログラムは、企画展「ミニマル/コンセプチュアル：ドロテ&コンラート・フィッシャーと1960-70年代美術」(2022年1月22日-3月13日)を題材に企画したものである。

1967年にデュッセルドルフでギャラリーを開いていたコンラート・フィッシャーが、アーティストのカール・アンドレたちによる指示書に拠ってインスタレーションを行った活動について、展覧会ではフィッシャーと作家たちとのやりとりの書面、当時の展示写真、作品を展示して紹介した。リチャード・ロングの指示書に従った展示やコンラートとの指示書のやりとりなど、再現展示や実際の指示書の展示に対する教員たちの関心も高かった。ワークショップの企画段階で、2つ目の論点としての「プログラムの目標」について、コンセプチュアル・アートをどのようにして生徒に理解させるか、どんなことを受け取ってほしいかについて意見が交わされた。意見の軸として、コンセプチュアル・アートの概念を知ること、概念を体験すること、造形行為を追体験することといった意見でほぼ一致した。追体験の具体的なプランについて、「写真」、「粘土」、「絵葉書」を材料とするプランが出されたが、最終的には、「指示書」どおりに作るというプランを採用した。ソル・ルウィットがギャラリー・フィッシャーでの個展でつけた立方体にヒントを得てはいるものの、「紙コップとサインペン」というオリジナルな材料を考案して追体験するという、新しいアイデアで造形ワークショップを行った。

ワークシートの工夫

以下はワークシートの設問である。

1. 「制作を通して何を感じましたか？考えましたか？」
2. 「完成した作品をみて何を感じましたか？」
3. 「これは作品ですか？指示通り再現したモノですか？」
4. 「この作品は誰が作者ですか。」
5. 「タイトルをつけてください。」

コンラート・フィッシャーが指示書を受け取りインスタレーションしたこと、またその展示物が無機的な物質性を感じさせるものであったことで、生徒たちには戸惑いもあったが、ワークシートの問いに従って生徒たちが思考を深め、気づきを得られるように工夫した。1人の生徒は、最後に次のような感想を書いている。

「最初は何とも難しそうな作品で理解することが出来るかと思っていたが、みてみると直感的に良さがわかり、いつも取らないメモをとることでなぜ自分が良いと思ったのか知

ることが出来た。紙コップでの制作は作品であると思った。まず作品でなければ、一体この物を何と呼べばよいか分からない。そして飾ってみて美しさを感じた。それがこの物体を作品と呼ぶ理由である。」

展示された芸術活動をワークショップで追体験することで、受け止める側に作品の受容と理解がなされたことが分かる。

②高校生鑑賞ワークショップ「カメラオブスキュラを作ろう！」（後掲90頁－99頁）

日時：2023年度 2023年11月4日（土）9：30～16：00 安井仲治展会期中

場所：企画展「生誕120年 安井仲治」展示室、チケット売り場横

人数：高校生10名 教員4名 学芸員1名

当プログラムは、1920年代から40年代に関西で活躍した写真家安井仲治（1903－1942）の展覧会「生誕120年 安井仲治—僕の大切な写真」展（2023年10月6日～11月27日）の会期中に開催した鑑賞&造形ワークショップである。写真に関するプログラムとしては、2014年に「これからの写真」展（2014年8月1日～9月28日）にあわせて、同様に「カメラオブスキュラをつくろう」を開催している。1回目の2014年には、展覧会にカメラオブスキュラの仕組みを模した展示物があつたことから、カメラオブスキュラの製作に重点をおいたが、2回目の2023年では、生徒がカメラオブスキュラの製作にかかる手間を、教員と美術館側がある段階まで進めておくことで作業の短縮を図り、カメラオブスキュラを使って写真を撮ることに主眼をおくプログラムとした。1回目のプログラムの経験が生かされ、テーマに深く迫ることができた。

生徒はカメラオブスキュラの歴史と仕組みの説明を受けた後に、段ボール製のカメラオブスキュラを各自が組み立て製作した。出来上がったカメラオブスキュラを使って、会場周辺で気に入った風景や事物を映し出し、スマートフォンで撮影した。白黒モードで撮影することで安井仲治の時代性を反映させ、撮った画像をプリントアウトして共有した。午後は、展覧会場で予め選択した作品5点を鑑賞し、ワークシートに沿って技法や制作上の工夫を考えさせた。その後、ディスカッションを行ったのち、再度ワークショップ会場周辺の撮影に臨んだ。二度目の撮影の画像を見ると、ディスカッションで発見したことが生徒間で影響し合ったことが見て取れる。空間の広がりや被写体の捉え方の工夫、カメラオブスキュラの特性を生かした撮影方法等が散見され、展覧会で作品をみる前の午前中の画像と比較すると大きな変化が感じられた。このプログラムで用いたカメラオブスキュラは、作家が用いた撮影媒体ではないため正確な追体験ではないものの、各自が撮影者の視点を持ち、展覧会場で観察した多重露出などの工夫や空間処理、瞬間の捉え方など、撮影者（安井仲治）の視点を辿りながら作品を鑑賞した。ワークショップでは追体験以上の体験として生徒自身があたらしい作品を作り出すことが出来た。

5. 鑑賞会と造形ワークショップの効果

愛知県美術館の高校生対象の教育プログラムの特徴は、鑑賞と造形を組み合わせた活動と教員との連携にある。当館に校外学習で来館する学校団体には、1時間から1時間半程度の時間的制約の中で、学芸員が一方的な解説型あるいは双方向の対話型の鑑賞会を行う

ことが一般的である。対話型の鑑賞会は、短時間で作品について理解を深める糸口を見出せ、他者の意見や価値観の違いを知ることも出来るが、当館の高校生対象のプログラムは5～6時間を費やすもので、いわばディスカッション型、探究型ともいえる総合的なワークショップである。この長い時間は、鑑賞という外部から得た刺激への熟考と発酵が促されるもので、プログラムを通して参加者一人一人から、新しいアイデアや造形物が生み出される時間となっている。鑑賞は、作品に関して、ワークシートで導き出されたキーワードや各自の考えを基にディスカッションを行い、ディスカッションはペアやグループワーク、ワールドカフェといった諸形式で取り組んできた。ディスカッションは、個人で鑑賞しただけでは容易に至ることが難しい段階にまで、各人の作品への理解や考えを短時間に引き上げられる手段であり、またディスカッション後には発表を伴うため、内容は参加者全体に共有されることにもなる。当館の高校生対象のプログラムは、現在では鑑賞と造形の二つの活動で構成することがほとんどで、設定したテーマを達成する上で、鑑賞と造形の活動は切り離しがたいものとなっている。作品鑑賞とディスカッションだけでは生徒たちの考えも固定的になりがちで、作品理解に広い観点からの考察や理解を目指すのであれば、多方向からのアプローチが用意されるべきであり、造形的な取組みは必要不可欠と考えている。鑑賞から生徒たちが記述する言葉だけでは表現しきれないものを、造形ワークショップで物を制作することを通して、新たな考えや表現を付加することが出来る。作品を深くみる、自分の作品を作り出す。新しく獲得した価値観で作品を理解し、自分が理解したことを造形物に反映させることができるのである。高校生にとって、美術館でのこのような体験は日常的なものではなく、同世代の生徒たちには互いに刺激を与え合う体験となっている。

また、学芸員と教員の連携では、展示作品等に関する情報は学芸員が提供し、教員からは学校現場の経験により、高校生らしい思考や行動パターンといった基本的な情報が示される。美術館と学校の役割分担と両者の緊密な連携が、教育プログラムのテーマを深く掘り下げることへつながっている。教員と連携することで、導入、展開、まとめといった授業の指導案のような内容をベースに、本番までに学芸員と教員は検討を重ね、打ち合わせの度に内容案を修正している。検討段階で、プログラムの目的から逸れて方向性を見失い、議論がかみ合わない場面を何度も経験してきた。このプログラムで何を生徒たちと追求したいのか、この原点に立ち返り、関わる教員と同じ目標に向かっていなければ、先に進むことは難しい。プログラムが目的に適って実施できれば、生徒たちは自身で到達した解釈から新たな作品を作り出すことが出来るのである。

「ミニマル/コンセプチュアル展」高校生鑑賞ワークショップ —疑問と戸惑い・コンセプチュアルって何？手引書どおりにつくって みよう— 2022年3月12日(土) 9:45~14:30

高橋承一(元高校教員、愛知県立芸術大学非常勤講師)

芸術作品を鑑賞する時、そこに表された空間や情景、視覚の心地よさを通して主題やイメージを探そうとする。鑑賞者は何が描かれているのか、造られているのかを観ようとする。しかし、ミニマルアート、コンセプチュアルアートはそうのように“表現された物”として作品を鑑賞しようとするとも何と伝わってこない時がある。作品を、そこからアイデアとプロセスを読み取るという“問いかけ”として捉え、鑑賞者がそれを手掛かりとして対峙した時に作品から示された意味が見えてくる。

高校生の視線が感覚的に作品の表面をなぞるだけでは「何コレ？作品？」「訳がわからない、意味がわからない」という結果に陥ると予想された。ミニマル、コンセプチュアルアートの表現の在り方に関わろうとする機会をつくりだすことが必要となり、それまでの鑑賞体験から“見え方、捉え方の組み換え”をどの様に起こさせるかが今回の鑑賞ワークのねらいとなっていく。その検討の過程を明確にすることで、この展覧会に対する教師自身の理解にも繋がっていく。

新型コロナウイルス感染症の流行は3年目を迎え、行動制限は緩和されつつあったが、行事や外出を控える雰囲気は続いていた。参加者を募っても人数が見込めない状況であったが、「学びを止めない」ことをメンバーが確認し合い実施の検討に入った。

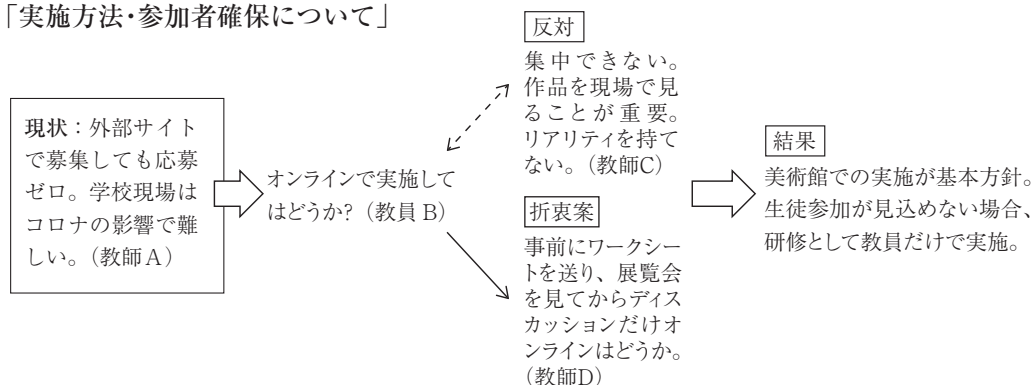
【検討会での話題】

検討会では展示を鑑賞した後、互いの感想や気づきなどのフリートークから始まった。美術教諭だけでなく2名の国語科教諭も参加されている(以前は社会科教諭もいた)。時に視覚的、触覚的な感覚に囚われ過ぎて思考が膠着し、対話の方向に行き詰ってしまうことがある。その様な時に、対象作家の言葉や経歴の背景にある文脈や状況、作品に潜んだ意味や意図を読み解く視点を投げかけてくれるのが国語科メンバーだ。対話に複眼的視点が生まれ、視界が開かれるアイデアが生まれる時がある。

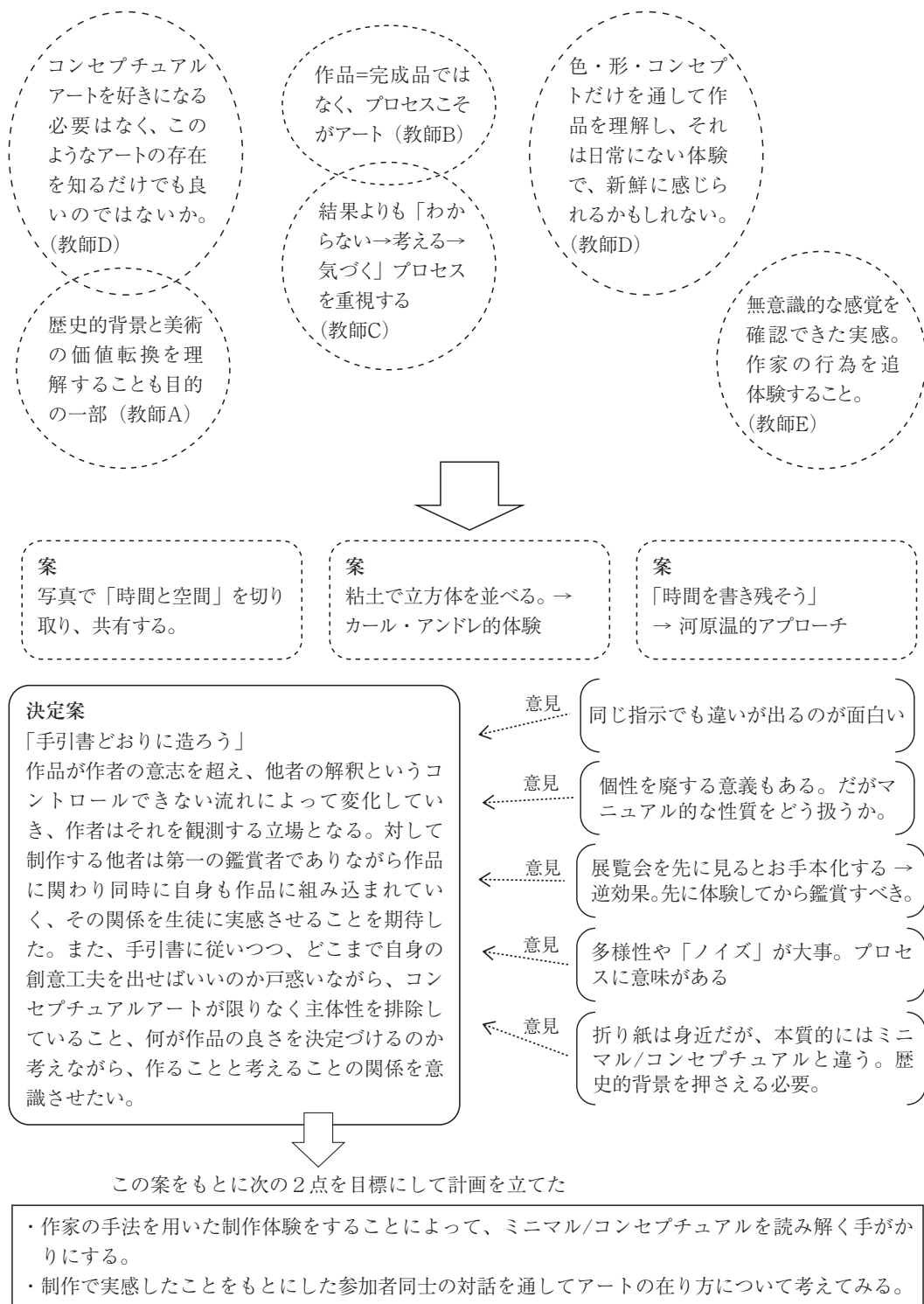
今回の話題の中心となった事柄は次の2点である。

- ・コロナ禍の状況でどの様に参加生徒を募り、実施するか？
- ・よく分からないアートに対してどのように対峙し理解しようとすればよいのか？

「実施方法・参加者確保について」



「生徒に感じ取って欲しい事と、そのための案について」



【日 時】2022年3月12日（土）9：45～14：00

【会 場】10階展示室／10階チケット売場横

【参加人数】高校生4名（2年生2名、3年生2名）、スタッフ7名（教員4名、学生アシスタント2名、学芸員1名）

【ねらい】

- ・作家の手法を用いた制作体験をすることによって、ミニマル/コンセプチュアルを読み解く手がかりにする。
- ・制作で実感したことをもとにした参加者同士の対話を通してアートのあり方について考えてみる。

【準備物】長机・椅子・飛沫防止パーテーション・名簿・名札・ワークシート・クリップボード・紙コップ・グラフ用紙・サインペン・プロジェクター・PC

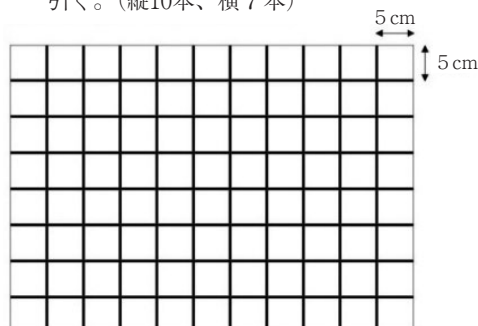
【日 程】

時間	場所	全体の流れ	備考
9：45～10：00	10階チケット売場横	スタッフ集合・準備・受付・配布物	
10：00～10：05		趣旨・日程等説明	・参加者がそろい次第開始・机1台につき2名とパーテーション
10：05～10：30		担当学芸員の解説	・ミニマル/コンセプチュアルの作品をどの様に鑑賞すればよいかのヒント・作品個々の注目観点・作品というものの考え方・ミニマル/コンセプチュアルが生まれた時代背景
10：35～11：40	展示室	展示会の鑑賞	・鑑賞中、教師は対話を投げかける。特にワークシート記載作家（カール・アンドレ、河原温、ソル・ルウィット）。回答を導き出すというより、一緒に考えていく視点で臨む（考え、予測と疑問、戸惑いの応えが午後の制作から得られるかもしれない）
11：45～11：50	10階チケット売場横	ワークショップの予告・昼食諸注意	
11：50～12：50		昼食	
12：50～13：50	10階チケット売場横	指示書の配布・説明・制作	・指示書をどこまで具体的にするか？参加者が考えて判断する余地を残す
13：50～14：10		「問い」と意見交換の時間	・参加者自身が作る時間である自覚を促したい・意見や質問の中から対話場面を創出する（意見と意見の橋渡し）「制作を通して何を感じましたか？考えましたか？」「完成した作品を見て何を感じましたか？」「これは作品ですか？指示通り再現したモノですか？」「この作品は誰が作者ですか？」「タイトルをつけてください」
14：10～14：20		まとめ	・読み解き方の話
14：20～14：30		アンケートと感想	
14：30～	展示室	展示室での対話・鑑賞後解散	・感想のまとめを後日メール等で個々に送信

指示書

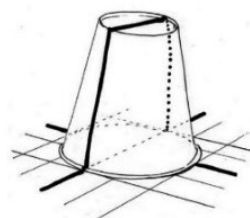
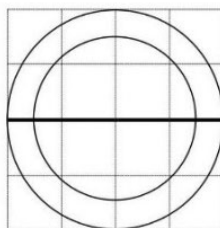
① 方眼紙のマス目に合わせてペンで直線を引く。

- ・方眼紙の裏、周囲6点に両面テープ貼る。
- ・5cm間隔で縦横にまっすぐ線を引く。(縦10本、横7本)



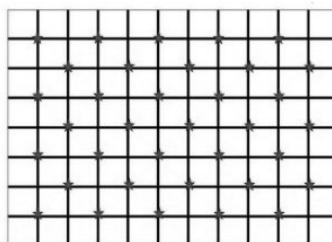
② 紙コップにペンで縦に二分分割する線を引く。

- ・紙コップを逆さまにして方眼紙の縦横線の交点(4×4cm四方の中)に置き、①で引いた線と繋がるように、側面→底面→側面へとまっすぐ線を引く。
- ・同じように計35個の紙コップに線を引く。



③ 方眼紙の上に紙コップを並べ、接着剤で固定する。

- ・①で引いた線の交点(図の星マークの位置)に紙コップを置く。
- ・方眼紙に描いた線と紙コップに描いた線が繋がるように紙コップの向きを決定する。



指示書による制作は以下の手順に従って実施した。

- ① 方眼紙に5センチ間隔のグリッドをフリーハンドで描く
- ② 紙コップの側面→底面→側面を通過する直線を一本、フリーハンドで描く
- ③ ①のグリッドの指定した交点上に紙コップを配置・固定する

〈留意点〉

※ 紙コップに書いた線と方眼紙に引いたグリッドの垂直・水平線のどちらかと必ず繋がる向きで設置。

※ こちらから細かく指示することはなく、基本的に指示書を読んで進める。

※ 制作には日常のかつシンプルな素材をそのままの形で用いるところからミニマルなものへの捉え方を体感させるため、紙コップを使用した。

※ 紙コップの向きの決定は参加者に委ねられる。参加者の選択により、平面上に引いた線は紙コップという立体上に引かれた線と見た目上で繋がったり切り離されたり、あるいは潜り込んだりする。

線の方向、数、形は参加者の意思によって決まる。

※ 具体案の下敷きとして、ソル・ルウィットがフィッシャー・ギャラリーにおける初個展で展示した「隠された立方体のある立方体」がある。

関係教師の各学校での呼びかけにより当初7名の参加申し込みがあったが、直前でキャンセルがあり4名の生徒で実施した。新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置下で少人数ながらも実施できたことが何よりだった。普段のワークショップであれば2桁の参加者が見込めたが、かえって落ち着いた状態でじっくりと感想や思考を深められたようだった。

【生徒感想】

「最初は何とも難しそうな作品で理解することが出来るかと思っていたが、観てみると直感的に良さがわかりいつも取らないメモを取ることでなぜ自分が良いと思ったのか知ることができた。紙コップでの制作は作品であると思った。まず作品でなければ一体この物を何と呼べばいいのか分からない。そして飾ってみて美しさを感じた。それがこの物体を作品と呼ぶ理由である」

「自分が自由に考えて自分で作品と認めれば作品だと言えると思います。今日の講座を通してミニマル/コンセプチュアルというジャンルの作品を観たことが無かったので、制作過程や構想を重視する視点が面白いなと思いました。私は絵を描いている時に自分の個性や自分が描きたいものを重視して考えているので、作品の過程や構想にも目を向けてみようと思いました。また自分が考えた芸術の視点を大切に、今日の講座を生かせるように頑張りたいです」

「少し難しいと感じていたけど河原温さんの日付の作品がとても気に入りました。一見シンプルで簡単そうに見えるけれど、私にとってそれが可愛くてオシャレだなと思いました。他の人と違い日常なことをそのまま作品にしているので大胆でいいと思いました。制作は、どうしたら効率よくできるのかと考えながらやったので、作業だなと思っていたけれども壁に展示すると影がいい感じに入って作品っぽいなと思いました」

「今回のプログラムでは今までの生活の中で見たことのある図形や物体が、置き方、組み合わせ方で違ったものになっていて驚きました。わかったような、よくわからなくなったような変な感覚です。ワークショップで作ったものは誰が作っても同じものになっていたら、ただの作業だけれど、少しでも創意が入って別のものになるなら作品だと思います」



高校生鑑賞ワークショップ「カメラオブスキュラをつくろう！」

【日 時】2023年11月4日（土）9：30～16：00

【会 場】10階展示室／チケット売り場横

【参加人数】高校生10名（1年生5名、2年生1名、3年生4名） スタッフ5名（教員4名、学芸員1名）

【ねらい】

- ・写真によって現れるイメージについて鑑賞と撮影実習を通して考える
- ・他者とコミュニケーションを通じた鑑賞活動の楽しさを実感する

【準備物】長机・看板・名簿・探検バッグ・ワークシート・会場図・アンケート・展覧会カタログ・名札・サインペン・付箋・作品図版

【日 程】

時間	場所	全体の流れ	備考
9：00～ 9：30	12 階アートスペース A	スタッフ集合・日程等最終確認・準備	
9：30～ 9：45	10 階チケット売場横	受付	・机1台につき2名
9：45～ 10：00		生徒集合完了・趣旨、日程等説明・スタッフ紹介	
10：00～ 11：00		カメラオブスキュラの製作	・「カメラオブスキュラとは」解説（カメラオブスキュラの歴史・カメラの仕組み・レンズの仕組み）・製作手順 ①材料確認②レンズ装着③外箱④内箱⑤トレーシングペーパー⑥動作確認
11：05～ 11：35	10 階屋外展示・ 10 階フロア内	撮影 1	・カメラオブスキュラで遊ぶ、撮影する（写り込んだ画像をスマートフォンで撮る） ・「推しの一枚」を提出・撮影動機も記録
11：45～ 12：50		昼食	・送付された画像データをプリント
13：00～ 14：00	展示室	展覧会鑑賞	・ワークシートの説明・重点作品がチェックされた会場図も配布
14：05～ 14：25	10 階チケット売場横	鑑賞ディスカッション	・3グループ 感想からディスカッションを深める「作品の中のどこに安井仲治の感性が表れている？」・グループごとにカタログ用意・各グループに教員1名がつき、生徒達が感じ取ったことが生きる意見交換の手助け
14：30～ 15：00		撮影 2	・「推しの一枚」を提出・撮影1と撮影2を比較し、どの様に自分の意識が変化したかを考察
15：00～ 15：15		ワークシート記入・整理	・他者に伝わるように書かれているか

時間	場所	全体の流れ	備考
15:15～ 15:45	10階チケット売場横	全体発表	・各グループ1名発表 撮影1、撮影2、安井仲治作品
15:45～ 16:00		アンケート等	・まとめ・アンケートの記入
16:00～		解散	
終了後		片付け・反省会	

【経 過】

- ① カメラオブスキュラ製作：参加生徒達との雑談の中から科学部に所属する男子を見つけた。彼が全員に向けて凸レンズを通過する光の屈折と投影される像のピントの仕組み等を解説した。生徒相互の学び合いの場をつくることでワークショップへの期待感と共有感が生まれた。

完成したカメラオブスキュラで館内の様々な場所を覗いて遊ぶ。各自が投影させた画像から「推しの一枚」をスマートフォンで撮影し、指定されたアドレスに送信した。画像はプリントアウトされてワークショップの場に掲示された。

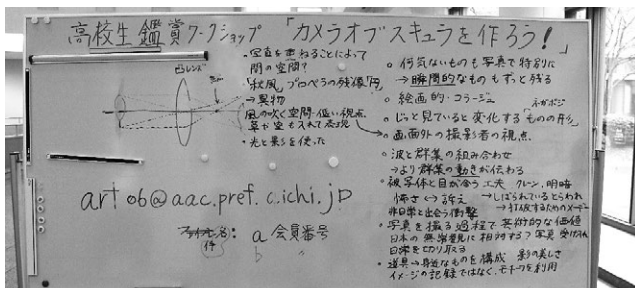


- ② 安井仲治展鑑賞：作品傾向が多岐に渡り、点数も多いため、あらかじめ指定した5点の作品を重点に鑑賞し、ワークシートに感想等を記入した。印画紙に光と影の反映が定着し画像として再現される仕組みをカメラオブスキュラで実感できた後での鑑賞は生徒達の鑑賞意欲を高めた。一点一点の作品に足を止めて興味深く観察し、互いの感想や考えを交換しながら鑑賞する様子が随所で見受けられた。
- ③ 意見交換：3グループ（1グループ3、4人）に分かれての意見交換。ワークシートの内容に沿った手順で感想や考えについて対話を進めた。教師は話題の整理と深まりを図るためにグループ毎に付添い補助をした。
- ④ 再度「推しの一枚」を撮る。午前の活動状況と比べて生徒達の被写体への構え方が明らかに変化した。撮るべき物を探し出し、光の状態や構成を工夫し、捉えようとする積極的な姿勢が見てとれた。



- ⑤ 全体での共有：グループ内での対話内容を全体に報告、共有を図る。生徒達は付箋、ワークシートの中で十分に記録を残していたので、単に作品への直感的な印象を述べるだけに留まらず、撮影意図、被写体に託した意味、造形効果などにも触れている内容であった。

終了時間が迫る中、さらに全体での鑑賞を深めていく時間を作ることはできなかった。



2. 鑑賞の前後で撮影した2枚の作品を比較してみよう

①何を撮った？

a	b
---	---

②どんなふうに撮りたかった？

a	b
---	---

③撮るとき、工夫した点は？どんな工夫をした？

a	b
---	---

3. 鑑賞、ワークショップを通して「写真」について思ったことや考えたこと

氏名	
----	--

安井伸治展 鑑賞ワークショップ

「カメラオブスキュラを作ろう！」

学校名		学校	氏名		グループ	
-----	--	----	----	--	------	--

(本日の流れ)

- 10:00～ カメラオブスキュラを作って遊んでみよう(a)
- 11:45～ 昼食
- 13:00～ 安井伸治展を鑑賞しカメラにできる表現を知ろう
- 14:05～ 展示の感想をみんなと共有しよう
- 14:30～ 鑑賞を踏まえ、カメラオブスキュラで撮影しよう(b)
- 15:15～ 撮影した2枚の作品を比較して、意識の変化を発表しよう

●撮影した写真の送信先●

→ art06@aac.pref.aichi.jp

*写真はモノクロで撮影 or 編集
*ファイル名を「教員「a+b+自分の番号」
2 教員「a+b+自分の番号」にする

1. 展示を見て気になった作品を選ぼう

作品名	
①作品を見て「何を」「どのように」感じた？	
②作品を簡単にスケッチしよう	③スケッチして気が付いたこと
④この作品はどのような工夫がされているだろう？ (例、二つのイメージが重ねられている、元の写真を大きく切り取っている など)	

⑤展示全体を通して感じたこと…安井伸治はどんな写真を撮ろうとしていたのだろうか？

--

【生徒の対話と感想】

A 「展示全体を見た時、綺麗な景色を撮ることではなく、意味があったり、撮った時の当時の心情を表されているみたいで、どんな気持ちだったのかよく想像できるのが面白いなって思いました。」

B 「普通に見ていて、何も感じないものを写真で撮る。なんか焦点当てて人をアップにして…」

C 「うん、写真に撮ってみるといつもと違うような。写ったものは撮影者が見ているもので、同じものが写っているのだけれど、実物を見ることと写真に撮ることはどのように違うのか？実際はほんやりと見ていても写真で撮ると違うものになる。」

A 「いつもなんか逃すというか、見ているとそのまま行ってしまう様なものを切り取って写真として残すと、自分が見たものを切り取っているような感じ！」

教 「切り取るってどういうこと？写真で切り取るっていう、さっきカメラオブスキュラで見て面白かったでしょ。Cが言ったように、日常で普通に見ているのが写真だと特別なような感じがする。」

A 「全体が見えるというか。ピントは合っているけど、他のものも見えている。」

教 「現場に居たことも関係してくる。あっちではこういうことが起こっていて、こっちではこういうことが起こっている。」

A 「同時並行していろんな現象が起きているっていうのが自分の目で得られる状況だ。カメラオブスキュラではピントが合っているものと、その奥にあるものはボケている。難しいですね。」

B 「そうだよ、自分が見ている視点と他者の視点がある。どこに注目して撮っているのか？それが違うから同じ写真でも違う。事件が違って見える。」

教 「そういうことを写真は見せてくれる。」

C 「人によって、同じものでも、シャッターの切り方っていうか、違うものに見えてくるわけ。」

A 「Cが言ってくれたように、建物が建物に見えないような。私も仲治の写真を見てそう思う。例えば鉛筆、その周りの逆光下で別ものに見えてくる。重ねた写真でも波と人の群集、水のしぶき、そういう写真が違う物体に見えて、火や木にも見えてくる、なるほど。」

教 「Aが言ってくれたのは、普段、何気なく通り過ぎちゃうように見えるものも写真で見ると特別なものに見える。そして、だんだん話移ってきて、同じものでも、シャッターを切る人、見る場所によって違うものに、同じ鉛筆でも違うものに見える。写真の特徴っていうか、写真ならではのことが、少しずつ見えてきているんじゃない？」

「人が凄い集団になっていて、みんなで綱引きするみたいな流れみたいで面白くて、よく見ると、奥の方には旗を持っている人が命令しているのが分かって前に警官の人が警棒を持っているのですけれど、瞬間、右足が上がって『ええっ！これ浮いている！』やっぱ瞬間を捉えているのだからという



《メーデーの写真》

のをすごく感じましたね。集団がそれぞれの動きをしていて、手前の方で取り押さえられているみたいな人がいる、その人のことを気にかけてちょっと振り向いている人がいる。みんな大体同じ帽子被って前を向いているのだけれど、袖もこっち向いてる、そこに臨場感があって『おお！』みたいな感じ。」

A 「なんだろう、でもなんか結構奥にいる人、本当に区別するじゃないですけど、結構ぼんやりして、ここにいる人達を黒く見せたいっていうことで区別をしているのかな。なんかもう、この加工した安井仲治さんが、この写真は見る人に確実にわかるようにそのように工夫されている。

教 「明らかにしよう。なんか、瞬間と言っていたでしょう？ どういう瞬間なの？なんで瞬間という言葉をついたか？」

A 「足を上げた時、ジャンプした時の体の動き、そういう瞬間的な持続性のないような体の動き、足上げて足がもう少しで着地する瞬間でシャッターを切っている。取り押さえられて、ずっとその態勢でいるとし、一瞬だったらその体勢ができるみたいな、別にポーズをとっているわけじゃないけど。警棒のブレ、そういうので私はこの瞬間だっていうの。」

教 「瞬間。その瞬間っていうのは、誰が決める？」

A 「シャッターを押す人、仲治。仲治さんが、デモのわーっとした感じ、そこにいたのだよね、この人。これは、自分の目の前に起こったリアルな出来事がどんどん進行していく。その場にこの人がいた。」

E 「《波と群衆》はなぜ波と群衆を組み合わせたのだろう。群衆はすごく人が密集して身動きが取れない。大きく動くわけじゃないけど、その中には動きや気持ちが詰まっている。固まった物というよりずっと訴え続けているので強い動きを持っている、それを波と合わせる。波には動きがある、群衆だけで動きを伝えるのは難しいけど、波と組み合わせることによって、その場の雰囲気や群衆の動きと合流するからすごいよね」



《波と群衆》

A 「クレーンや機械、一切が逆光ですごく黒く見えて、後ろに空があった写真でした。窓のように感じた。工場じゃない雰囲気、面白いなって思いました。それを見せるために人間と組み合わせているっていう感じ。」

教 「これは組み合わせているよね。」

B 「《凝視》、3枚ぐらい写真が重なった表現があって、元々は1人のこの写真と、工場、工事の写真と事件があったのだけれど、それをこうやって組み合わせることで、人はこっちをじっと見つめているような感じで、クレーンとか電車が絡みあっている。」

C 「私はそれを見た時に目が奪われるっていうか釘付けになるっていうか、目が合っちゃいけないものと目が合った時の怖い感じ、鳥肌が立つ感じがある。何でそういう感じになるのだろうって思った時にクレーンの壊れている部分で目の部分が囲われていたからそれが誘導になっているのかな、この部分は明るいけどこの部分はクレーンで囲まれているから暗くて、暗い所にここだけ明るいからそこに目がいく。だから、パッと見た時に目が合うように工夫されて、その人を引きつける雰囲気やちょっと怖い感じが伝わるように表現されてかっこいい」

F 「今のは、写真の中の人と目が合って怖いという話だったけれど、僕は見つめてきて訴えかけてくる気がしました」

教 「今の意見、真逆だね。見てはいけないもの見ちゃったみたいなのと反対に、あの写真からこちらをこう見返されているような、そういう視点を感じた。」

E 「見ちゃいけないものとは普通は絶対目を合わせないじゃないですか。普通に生活してれば日常的にしないこと。今、目が合っているのだからという非日常的なところから感じる恐怖や衝撃ということを言いたかったのです。」

F 「うん、自分とはちょっとなんか違う見方をしているけど怖い印象もありました。」

教 「誰か直線的なものとの組み合わせの事も言っていたよね」

F 「クレーンとか電線とかで人が捕らわれているみたいな、縛られているみたいな感じがあると思いました。」

E 「メーデーにいる人は思いを持っているから参加しているわけで、“捕らわれている”というのがすごくいい表現だなって思いました。私も何か不自由を感じてそう思うことがある、それを打破するためにメーデーに参加しているってわけで、その捕らわれる理由はめっちゃ共感できた。」



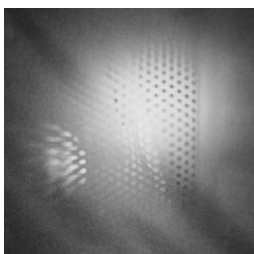
《凝視》

G 「この《道具》は身近な道具をモチーフに構成しているのが面白いですね。この作品は一見ただ並べているだけみたいに見えるのですが、よく見るとその影が面白い。手前にドリルがあってここにドリルがあるのかと思ったら影ができています。直角の定規があるのですが、それに影ができ、それも層というか道具が重ねてあることによって現れる影なのかもしれない。立体的に見えるけれども平面的にも見える、一つの流れに対して定規が遮っていたりする。モチーフとしては身近なものなのだけれど、写真に残すことで面白さが発見できるのはいいなと思います。」

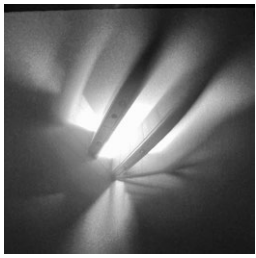
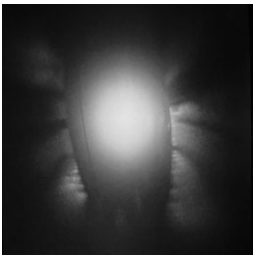


《道具》

【カメラオブスキュラで撮った「推しの一枚」と生徒のコメント】

午 前		午 後（安井仲治展鑑賞後）	
	「木々」 前後で、影が落ちている木と、陽が当たっている木で分かれていたので、違いを出したかった。周りが暗くなることを利用して木々の隙間から光がもれる感じを出したかった。周りの暗さと手前の木の暗さを繋げて、丸い光に木が差し込んでくようにした。		「天井」 凸レンズによって周りが歪んでいくのを利用して、ただの天井に迫力を出したかった。光が漏れ出しているところを目立たせたから顔のようになった。手前と奥で光と影の違いを出したかった。電球を中心にした。
〔教員のコメント〕 映し出されたコントラストの強い画像と周辺部の暗さが作る影絵のような美しさに魅かれてるのがよくわかる。午後はその効果を生かして天井と電球をモチーフに求め、表現の意思が見てとれる。			
	「長椅子」 長椅子独特の腰掛ける部分の縞を撮りたかった。反射が強い部分を選んで、その独特な形が伝わるようにした。また、角度的に縞というのがよくわかる角度にした。		「棚」 一部分をどアップにして物の全体像が想像しにくい感じ、水玉が注目ポイントになるように、それ以外のものを写さないよう工夫した。また、解像度を高くしすぎないで、周辺にいくほどぼやかすことで水玉がずっと続いているのを感じられるようにした。
〔教員のコメント〕 美術館にあるガラス製のベンチに自然光が通過し光がシャープに拡散する様子を映り込んだ画像から発見し、魅せられている。午後は、このような光と影が作り出すドラマチックな効果を細心の工夫で作り出そうとしている。			

	「エレベーターと天井」物をその流れを意識して撮りたかった。逆さの面白さを見せるように配置の工夫、構図の工夫をしました。		「階段から窓を撮った」一発で見て何か分からないように、角度と光の入り方。
[教員のコメント] どの様に構成するかを工夫している午前に対して、午後は画面の中でどのような光の演出をしていくかに関心が移っている。そして、モチーフの窓が写ったモノとしてとらえるのではなく、光を演出する装置としてとらえている。			
	「はしご」奥行きがあるようにしたかった。はしごが手前に来るようにした。		「三角コーン」三角コーンを主役にしたかった。階段が三角コーンを囲んでくれるようにした。
[教員のコメント] 透視図的な遠近で奥行きを写し出そうとしている午前に対して、午後では主役となるモチーフの周辺の空間をとらえることで広がりをも求めているのではないか。			
	「友達がカメラオブスキュラを持って通過しているところ」デジタルではないカメラに興味を持っているような様子。友達にちょっと持って歩いてお願いして撮らせてもらった。自然な感じにしたい。		「エスカレーターの下り」エスカレーターに導かれているような感じ。展覧会では、丸太を顔として芽や木の実で顔を作った写真や、鎌と斧など、ふと目に写った写真が撮られていたので、自分も自ら何か撮ろうという気持ちではなく、目に入ったものを撮ろうという気持ちで撮った。
[教員のコメント] 2枚ともに自分の感じ方を大切にシャッターを切っている様子が画面からうかがえるが、エスカレーターそのものが対象ということではなく、エスカレーターを媒介として目に映ったその場の印象を捉えようとしている。安井伸治の作品からひらめきを得ている様子がわかる。			
	「外の木を遠くから見て撮った」木を中心として注目させるように撮りたかった。木を大きく見せるために、遠くから撮ることを工夫した。		「美術館の天井・外の景色」天井や外の景色だけでなく、床も見えるように撮りたかった。美術館内のすべてがわかるように、遠くから撮ったり、周りをぼかしているようにして撮った。
[教員のコメント] 主役になるモチーフがより映えるように周囲との関係に気を使いながら画面の収め方を工夫している様子がうかがわれる。午後は斜めからの視点がスケール感を演出している。			

	「展示室の天井光」 綺麗な光を表現する。 綺麗な光を撮るために 少しぼやかして撮った。		「柱」 カメラレンズの性質を生かした写真。レンズの効果を生かそうと、まっすぐな柱を真正面から取った。
〔教員のコメント〕 2枚共に光をテーマにして撮っているが、午後はレンズが持つ効果を工夫に加えた。			
	「足と非常口」 踏み出す感じが出たかった。ピントを足に合わせることで足主体。		「天井」 区切られた画面を作りたいかった。天井を壁で一つの床に見えるような場所を切り取った。直線が多いところ。
〔教員のコメント〕 午前撮った画像からイメージを付加しようとしているが、午後は現実の風景を抽象的な構成で画面を造ろうとしている			
	「エスカレーター」 平面的な作品にしたいなくて、「空間」を表現したかった。空間や広がりを感じられるように撮りたかった。正面から撮ったり、手前と奥が感じられないような角度から撮ったりすると、平面的になりがちなので、奥行を感じられるような角度や構図を考えた。		「同じ場所」 上を見上げるような形で天井や柱が写るように撮った。空間を感じられるように撮りたかった。角度をつけて左まわりに丸く広がる空間を感じてもらえるよう心がけた。右側に壁を写してしまうと、空間の広がりや途絶えてしまうと思ったので、右側には何も映さなかった。
〔教員のコメント〕 2枚ともに大きな空間をテーマにして工夫をしているが、午後は目に写る巨大空間の全部を画面に収めるのではなく、撮る角度や画面の切り方に工夫を凝らして空間の広がりや演出しようとしているのがわかる。			
	「エスカレーター」 エスカレーターや建物が複雑に重なっている様子を写したかった。細部まで映りこむように中央を明るめにした。		「ライト」 天井のライトが綺麗に連なって光っている様子を撮りたかった。わざとピントを合わせず、光が不思議な形をしている状態で撮った。全体を暗めにして光を強調した。
〔教員のコメント〕 形の面白さから光の演出に興味に移っている。あえてピントを合わせない実験的な工夫は鑑賞から得たものだろうか。			

【まとめとして】

日常の道具として、私たちの生活にはデジタル機器が深く浸透している。写真も同様に、フィルムを印画紙に焼き付ける方式から、モニターに映し出すデジタルデータへと移行した。現在では撮影枚数を気にする必要がなく、その場で画像を確認し、すぐにプリントすることができる。専門的な知識がなくても扱えるようになり、写真はより身近で生活に欠かせない道具となった。しかし、デジタル化・小型化の進展は、カメラを“ブラックボックス化”したともいえる。光と影の現象を経て像が結ばれ、それが印画紙に定着するという仕組みや、その効果を実感的に理解することが難しくなっている。

そこで今回、カメラオブスキュラによる画像観察を通して光学的仕組みを体験させることで、安井仲治の撮影技法や対象への眼差し、創作における試行錯誤をより実感をもって捉えられるのではないかと考えた。この狙いは的中し、生徒たちは自身の体験と作品を結びつけて理解を深めていった。

優れた作品には、多様な解釈やイメージを喚起し、人に伝える力がある。生徒たちは作品の前で感じたことを熱心に語るものの、作品がもつ多層的な要素や、それらが絡み合って生まれる表現に対して感性が十分に反応しているにもかかわらず、しばしば曖昧で情緒的な一言でまとめてしまうことがある。それが、物理的な光の現象を表現効果として示す体験をさせることで生徒たちの探究心を目覚めさせたのではないだろうか。まず、生徒たちは自作のカメラオブスキュラを用いて、像が結ばれる位置や光の強弱による見え方の違いを観察した。光の流れを身体で追うように確かめる中で、多くの生徒が「像が揺らぐ瞬間」や「背景と前景が反転して見えることの不思議さ」に気づいた。こうした体験は、スマートフォンで撮影する際には意識しない「見ること」の物理的なしぐみに触れる契機となった。

次に、その体験を踏まえて安井仲治の作品を鑑賞し再度撮影させたところ、生徒の発言や感想には明らかな変化があった。具体的な言葉で語られ（光学的視点、技法的視点、作家の意図への想像など）、技法と表現を結びつけて考えようとする姿勢もみられた。

このように、カメラの原理を体験的に理解することは、作品に対する感覚的な反応をより豊かな言語表現へと発展させるきっかけとなった。生徒たちは、光学的現象の知識を基に自分の見方を説明しようと試み、他者の意見を聞きながら多様な解釈の存在に気づき始めた。鑑賞の過程において「どのように見えるか」「なぜそのように感じたのか」を自覚的に扱う姿勢が育ったことは、この実践の大きな成果である。

実践を振り返って

二つの鑑賞ワークショップは、①写真表現の原理を体験しながら作品理解を深める実践と、②ミニマルアート、コンセプチュアルアートの制作・鑑賞を通して作品が“なぜそうになっているか”を考え見方を理解する実践であった。一見まったく異なる内容に思われるが、生徒が作品への向き合い方を問い直し、鑑賞の「見る・考える」基本的な組み立てや土台を更新していく点で、共通した教育的価値がある。

①では視覚理解を身体的に感じ取ることで、「なぜそう見えるのか」といった根源的な疑問が生まれ、表現の要素を自覚的に扱うようになり、体験・鑑賞・言語化・再び体験へと循環する学びが見られた。②では「作品＝完成した表現」という約束事を問い直す制作過程そのものが作品の意味に関わり、鑑賞の焦点が、「出来上がった形」から「作品が成立する条件」へと移行した。これは、コンセプチュアルアート特有の「問いに向き合う鑑賞」を生徒が体験し、作品のもとにある思考の筋道を読み解く姿勢を学んだ。

両実践に共通することとして、生徒が「分からなさ」や「違和感」をきっかけに思考を深め、対話を通じて多様な解釈に触れながら自分の見方を更新していくという構造である。写真の原理に驚く、概念芸術に戸惑うといった感情的反応は、理解の妨げではなく知的探究の起点となることができた。美術鑑賞における重要な学びは、固定化した見方を揺さぶり、新たな視点を獲得する過程にあることが確認できた。このことは高校生を対象とした鑑賞の中で常に留意してきたことでもある。

さらに、これらワークショップは、これからの学校教育との接続という点でも示唆的である。現行指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」や探究的学習が強調されているが、それを実現するためには、生徒自身が思考の枠組みを自覚し、それを越える経験が欠かせない。カメラオブスキュラでは技術の根源に立ち返る体験をし、コンセプチュアルアートでは作品の意味や価値を問い直す機会を得た。これは、単なる知識習得では到達できない、批判的な視点や読解力の育成とも結びつくと考ええる。

AI時代の現在、技術が高度化する一方で、「成り立ちを理解する」「考え方を読み解く」力がより重要になっている。その様な意味で生徒自身の思考を能動的に働かせる学びとなった。高校生の美術鑑賞は、作品を見るだけではなく、「物事をどう捉えるか」を問い直す場としてユニークな教育的価値を内包しているのである。

2025年度 愛知県美術館研究紀要 第32号

2026年3月発行

編集・発行 愛知芸術文化センター 愛知県美術館
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2
Tel: 052-971-5511 (代)
<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/>



制 作 共生印刷株式会社

Bulletin of the Aichi Prefectural Museum of Art No.32
2026

Edited and Published : Aichi Prefectural Museum of Art
1-13-2 Higashisakura, Higashi-ku, Nagoya 461-8525 JAPAN
Tel: +81-52-971-5511

Printed : Kyosei Printing Co., Ltd.

© 2026 Aichi Prefectural Museum of Art, All Rights Reserved.